

別紙 1－1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 後 藤 綾 文

論 文 題 目

青年期の援助要請にかかわる社会的要因

—友人と教師の役割に着目して—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	中谷素之
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	松本真理子
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	平石賢二

別紙 1－2

論文審査の結果の要旨

「悩みがあるけれど、なかなか誰かに相談できない」といった葛藤や心配は、青年期にある生徒・学生にはしばしば生じる心理的問題である。教育・学校心理学領域で言われる「援助要請」とは、困ったことや悩みなどのニーズを他者や社会的資源に援助を求める意図および行動を意味する。本研究は、青年期における援助要請の促進について、これまであまり注目されてこなかった、友人や教師などの重要な他者の役割や機能を取り上げた。友人との関係性のあり方や、社会的に共有された認識や規範の影響、そして教師によるクラス内での援助要請への働きかけについてモデル化し、実証的に検討したものである。

第1章では、援助要請に関する先行研究を概観し、本論文の目的を示した。今日の青年および学校をとりまく社会的背景、青年期の発達の特徴、そして周囲の他者や所属集団という社会的要因に着目する有効性について論じた。先行研究では援助要請の促進について、援助要請を行うことのできる個人や援助要請を控える個人の内的要因が主に注目されており、周囲の他者や所属集団という社会的要因の影響を受けるプロセスは未だ実証的に検証されていない。周囲の友人との関係がどのようなものであるのか（関係性）、お互いに援助要請を行うことを周囲の友人と認め合っているかどうか（共有性）、そして教師は援助要請についてどのように働きかけているのかといった社会的要因の重要性について、内外の知見に基づき議論した。

第2章では、援助要請の対象者選択の背景にある、友人との関係性に注目した。研究1では、大学生を対象に、主要な5つのサポート源への援助要請意図と友人関係に対する不安との関連を検討した。5つのサポート源への援助要請意図を用いてクラスター分析を行った結果、友人への援助要請意図が高いものの、インターネットも合わせて選択する群の存在が示された。分散分析の結果では、友人とインターネットを選択する群は、友人と同じかどうか気になり、友人にどのように見られるのかという不安が最も高いことが示された。研究2では、中学生を対象に、教師と友人という2つのサポート源への援助要請意図と、友人との仲の良さと援助不安（呼応性の不安）との関連を検討した。その結果、援助要請を行う対象者の選択にはタイプがいくつか見られ、そのタイプごとに、友人との関係性には差異があることが示された。また友人との関係性と援助要請との関連は、発達段階ごとで異なることが示唆された。

別紙 1－2

論文審査の結果の要旨

第3章では、援助要請者と援助要請の対象者との間でお互いの関係効力性や援助要請態度が共有されていることが、援助不安や援助要請意図とどのように関連するのかについて検討を行った。研究3では、大学生を対象にペアデータを収集し、関係効力性の共有性と援助不安との関連を検討した。分散分析の結果、関係効力性を共有している程度が高いほど、援助不安の中でも呼応性の不安が低いことが示された。研究4では、中学生を対象に、クラスメイトの援助要請態度と生徒個人の援助要請態度の関連に着目した。分散分析の結果、学習面の悩みに対する援助要請態度を共有している程度が高いほど、援助不安（汚名の不安）が低いことが示された。さらに、生徒個人が認知する学級のクラスメイトの援助要請態度が、生徒個人の援助要請態度や援助不安に直接的に影響を及ぼし、援助要請意図を間接的に促進する結果も得られた。これらから、援助要請の認知を共有していると、援助不安が低く、援助要請意図も高くなる傾向が示され、青年の援助要請を促進する可能性が示された。

第4章では、教師の働きかけの効果に注目した。まず、援助要請を促す働きかけに関して①生徒から教師への援助要請を促す教師の働きかけ②生徒同士の援助要請を促す教師の働きかけの2次元からなる新たな尺度を構成し、一定の信頼性と妥当性が認められた。次に、階層線形モデリングによる分析の結果、2つの教師の働きかけは教師への援助要請意図とクラスメイトへの援助要請意図を高めることが示された。これらのことから、日常の学校生活の中で、教師が援助要請に対して積極的意義や肯定的態度を持っており、援助要請を行いやすい雰囲気や学級全体に示すような教師の働きかけの有効性が示唆された。

第5章では、これまでの研究によって得られた知見を整理し、本論文の意義と今後の課題・展望が議論された。

以上のような内容の本論文について、口述試験では、3名の審査者から以下のような指摘・疑問が出された。

1. 本論文では、中学校では学校教育の観点で議論がされているが、大学生についての議論は十分であろうか。学校教育とは異なる文脈で、研究室など教員の役割も大きく、援助要請の必要性も高い。そのような大学生の支援に本論文の内容を展開させることについては、どう考えるか。

別紙 1－2

論文審査の結果の要旨

2. 中学生と大学生など、その年齢段階の学生を扱うことで青年期発達を追ったことになるのだろうか。環境の違いと発達とを混同する危険性もあるのではないか。その年齢での心理的な発達現象にどれだけ焦点を当てられたのか。
3. 個人内要因の扱いが十分ではないのではないか。同じ環境でもその個人のもつ傾向、特性によって、支援の効果も異なってくるのではないか。
4. 援助要請の概念について、その深さや質の違いによる影響の違いをどう考えるか。本論文では、一貫して代表的な数項目で測定しているが、異なる尺度や測定法、概念も考えられるのではないか。
5. 第4章の教師の働きかけにおいて、対教師態度と生徒間での態度を区別して概念化した点は興味深い。しかし今回得られた結果から、このように弁別したことの独自性は十分に示されているといえるか。特に生徒どうしの援助要請を促すことの副次的効果などにも考察するべきではないか。

これらの指摘に対して、論文申請者はその意味を十分理解し、その上で、研究の内容に基づいて、自身の主張や課題について、適切に回答した。

上記のような課題も考えられるものの、本論文の内容は、青年期における援助要請に着目し、社会的要因から援助要請の促進を実証、議論した、研究および実践の上で意味あるものといえる。すなわち、1. 援助要請の促進に社会的要因の影響を考慮し、関係性と共有性の観点から実証したこと。2. 青年期の援助要請について、学校教育的な問題と、臨床支援的な関心とを視野に入れ、生徒・学生の適応を支えるための一環した研究が蓄積されていること。3. クラスにおける教師の働きかけを、対教師および生徒間という2次元でとらえ、それらの効果を多数のデータを用いて実証的で妥当な検討を行っていること など、教育・学校心理学領域で、独自性ある重要な論文だと考えられる。そのため審査者は全員一致して「可」と判断した。